

新たな石垣を発見！

赤穂城跡二之丸東仕切り周辺の発掘調査と整備

平成27年2月 赤穂市教育委員会

1 赤穂城と整備工事

赤穂城の歴史は、江戸時代になって播磨に入封した池田家が、姫路城の支城として築いたことにはじまります。このときは現在のような形ではなく、現在の本丸あたりの場所に、一重の石垣が築かれただけの「搦上城」であったとされています。その後、正保2(1645)年に常陸国笠間から入封した浅野長直が、この搦上城を大幅に拡張整備する形で、現在みられる赤穂城を築いたのでした。

明治時代となると、赤穂城は民間に払い下げられましたが、昭和46年の国史跡指定を機に、様々な整備が継続的に行われてきました。現在は、二之丸庭園の整備に加え、二之丸東部城壁(加里屋川沿い)の修理を実施しております。その過程で、平成25年度の発掘調査により、これまで未発見の石垣が確認され、その整備のため、今年度に本格的な調査を実施したのです。

2 二之丸東仕切り周辺

赤穂城では、藩主の御殿があった本丸をぐるりと取り囲むように、二之丸が築かれています。しかしこの場合、戦時には本丸を完全に包囲されてしまう危険があったため、二之丸を南北2つに分割するように土塀で「西仕切り・東仕切り」が築かれ、それぞれに「仕切門」が設置されていました。西仕切り、西仕切門については、二之丸庭園の整備に伴い、平成21～23年度にかけて大部分が整備されました。一方、東仕切り、東仕切門については、平成11年度に本丸護岸の発掘調査時に仕切り土塀の基礎石垣の形状が把握されたほかは、まったくの不明でした。

しかし赤穂城に関する様々な古絵図が残されており、その形状や規模はある程度推定することができました。

3 絵図の検討

絵図は、年代の不明なものも多くありますが、それぞれの絵図の情報をまとめると、以下のようなことが指摘できます。

- (1) 東仕切門は瓦葺きで、いずれも東側を向いている。
- (2) 東仕切り土塀は、白漆喰壁、瓦葺きで描かれることが多い。
- (3) 東仕切り土塀の西側は、本丸護岸に食い込んでいる。
- (4) 東仕切り土塀と門との接続部分は、いずれも鍵型に折れている。
- (5) 東仕切り門の東には、番所がある。

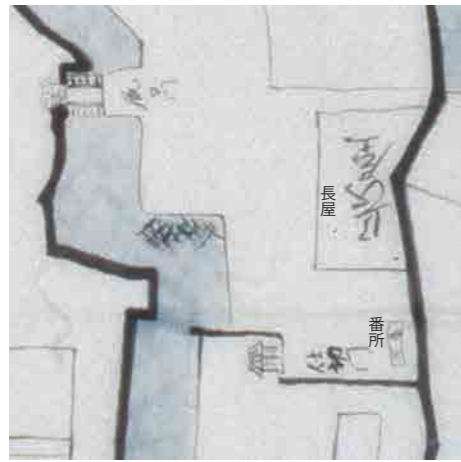
(1)を根拠に、赤穂市立歴史博物館にある赤穂城のジオラマ模型では、東仕切り門は東側を向いています。赤穂城北側の三之丸方向から攻めてきた敵が、本丸を包囲できないようにする構造と言えます。(2)は西仕切りの発掘調査でも多量の瓦が見つかっており、瓦葺きであったことは間違いのないようです。(3)は、平成11年度の発掘調査で実際に確認されています。(4)は、東仕切り周辺の規模を記載した絵図③と⑥を検討する必要があります。(5)は門の管理のためのものでしょう。

このような情報を整理した後、発掘調査成果を見てみましょう。



赤穂市立歴史博物館 展示ジオラマ

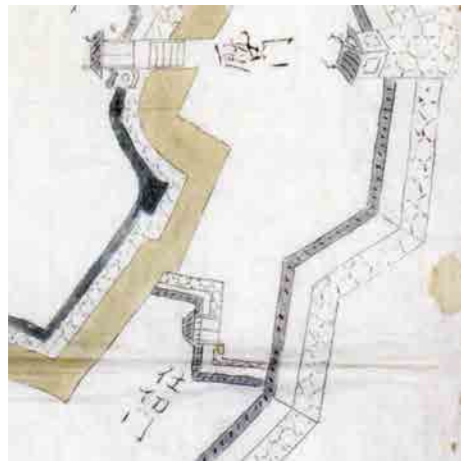
「赤穂城内侍屋舗間数之図」(翻刻) 『赤穂市史』第五巻より



①赤穂城内土屋鋪間数之図
元禄 15 (1702) 年 (昭和 6 年写)
花岳寺蔵

元禄 15 年 9 月に永井直敬が赤穂藩主となり、11 月 4 日に幕府代官から赤穂城の引き渡しを受けた際、在藩していた龍野藩主より差し出された絵図。昭和 6 年写。

仕切りが本丸堀に突き出るように築かれていることが描かれているほか、北側には**長屋**や**番所**が、南側には**馬場**が所在していたことがわかる。



②播磨国赤穂城絵図 (播磨国赤穂城石垣崩并樋損候覚)
延享 2 (1745) 年
個人蔵

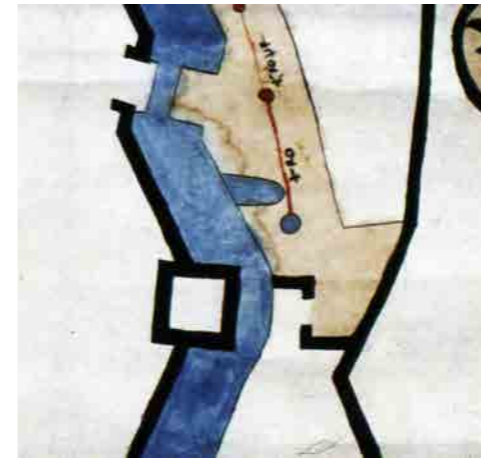
延享 2 年、藩主森政房が、石垣と樋の破損個所の修復を幕府に申請した際の絵図控。製作年代のわかる数少ない絵図。

土塀の築かれなかった本丸南東石垣と、**瓦葺き土塀**の築かれていた二之丸東部石垣及び東仕切り土塀との描き分けがなされている。絵図全体の門の描き分けは、原則として櫓門と鯨の有無のみであるが、東「仕切門」のみ、門扉の上部に特異な描写が見られる。ただし、描き分けはこの絵図のみである。



③赤穂加里屋城図
製作年代不詳 (明治初年写)
花岳寺蔵

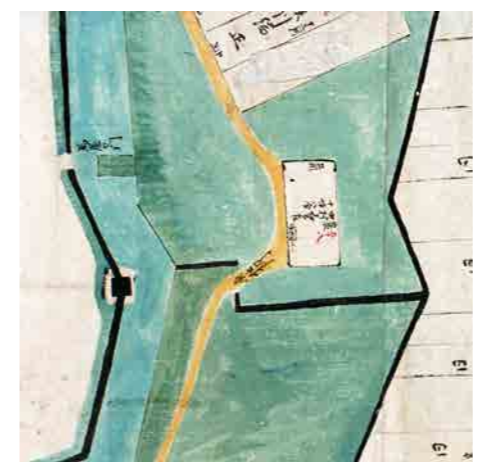
赤穂城の全域が描かれ、櫓や門の規模、石塁の長さや堀幅などの情報が書き込まれた絵図。二之丸東部城壁から東仕切り土塀が、西方に「一三間半」延びたところで鍵形に折れ、「二間六分」のところに「高一間七分、横一間半」の「**仕切門**」が描かれている。**東仕切り**は、二之丸東部城壁と同様、**瓦葺き土塀**として描かれている。本丸南東石垣上部には「土手」と記載がある。



④赤穂城内水筋絵図面
江戸時代後期
兵庫県立赤穂高等学校蔵

城内の二之丸及び三之丸の水道樋線を描く絵図。二之丸門をくぐって二之丸の東部へ回った上水道配水路は、東仕切り北側で止まっていることがわかる。また本丸堀には二之丸へ突き出すかような**堀切状地形**が認められる。

仕切りは東西両方とも鍵形に屈曲して、仕切門と接続されている。



⑤明治初年赤穂城内図
明治時代初期 (明治 8 ~ 13 年)
個人蔵

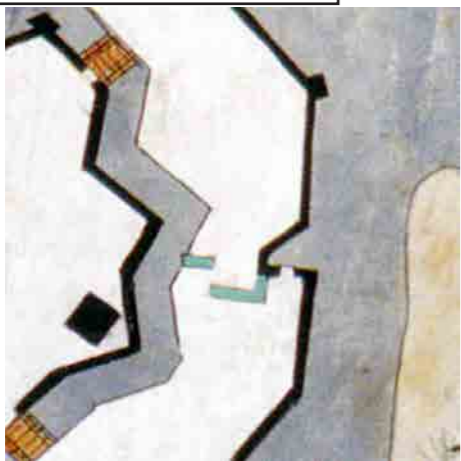
平民に苗字がみられ、二之丸南郭に森三霊祠が残されていることから、**明治 8 ~ 13 年**の作成と評価できるが、払い下げられた土地の所有関係を重視したためか、城郭の形状は著しくゆがんでいる。しかし、いまだ**東仕切りは破壊されておらず**、また**周囲も一部を除いては更地のまま残されている**ことがわかる。絵図全体として、門の描写はないが刎橋門以外は「〇〇門」と描かれており、門が遺存していた可能性も考えられる。



⑥浅野家時代赤穂城之図
製作年代不詳
兵庫県立赤穂高等学校蔵

赤穂城の縄張をかなり忠実に描いているほか、城壁や櫓の寸法を記している絵画的な絵図である。ただし門の描写は櫓門とそれ以外の 2 タイプに限られる。仕切門は、二之丸東部城壁から東仕切り土塀が、西方に「十四間老尺」延びたところで鍵形に折れ、「二間四尺七寸」のところに「仕切門」がある。門西方については土塀が描かれず、**本丸外堀と連通した堀が接続**しているため、江戸後期の「赤穂城内水筋絵図面」と近い。

ちょっと変な絵図



⑦赤穂城下町絵図
寛文元 (1661) 年 ~ 寛文 8 (1668) 年頃
姫路市城郭研究室蔵

赤穂城と城下町を中心に、周辺沿岸部までを描いた絵図。塩田の干拓状況から年代を絞り込むことが可能である。

東仕切り土塀が描かれているが、二之丸城壁への取りつき方が異なるとともに、仕切り土塀の東側には**門があるかのような開口部**があり、**外側には海が広がっている**。ちなみにこの絵図には、三之丸東隣にあたる米蔵脇の船入が描かれていない。



⑧赤穂城下町絵図
年代不詳
赤穂市教育委員会蔵

赤穂城の絵図には、現在の形とまったく異なる縄張絵図の一群がある。そのうちのひとつに、赤穂城築城にとりかかった正保年間 (1644 ~ 1648) 作成、延宝 8 (1680) 年写しの絵図があること、本来築かれなかったはずの「**三重天守**」が描かれていることから、**築城前の縄張設計図である可能性**もある。この絵図も類似した城郭の形状を示す。**東仕切りに沿って深く堀が入り込み**、橋によって南北を往来するようになっている。

4 発掘調査成果

発掘調査の結果、

- (1) 二之丸腰石垣
 - (2) 二之丸東仕切り土塀基礎石垣
 - (3) 近代石垣
 - (4) 埋没石垣
- の4つの遺構が見つかりました。

(1) 二之丸腰石垣

二之丸腰石垣は、かなり大きく破壊されているものの、約60cm角の大ぶりな**花崗岩**を主に使用した石垣で、長さ約25m、高さ1.4mにわたって確認されました。ただし南の約8m分は、やや角度を西に振り、直径20～30cmの**流紋岩**が列状に並んでいました。この石列には裏栗石がほとんどなく、花崗岩の石垣とはまったく異なっていたことから、腰石垣から二之丸土塁の法尻を合わせるための石垣であったと評価しています。

(2) 二之丸東仕切り土塀基礎石垣

二之丸東仕切り土塀基礎石垣は、二之丸腰石垣に**ほぼ直角**に見つかりました。西側は**近代石垣によって破壊され**、見つかったのはわずか2mに過ぎませんでした。石垣はほとんど花崗岩でしたが、間詰石や天端石に流紋岩が使用されている点が、腰石垣と異なります。**石垣上面が平らなこと**から、**ここに土塀がのっていた**と考えています。

面白いことに、この石垣の根石は、腰石垣方向に傾斜をもって検出されており、**腰石垣より後に築かれた**ことは明らかです。

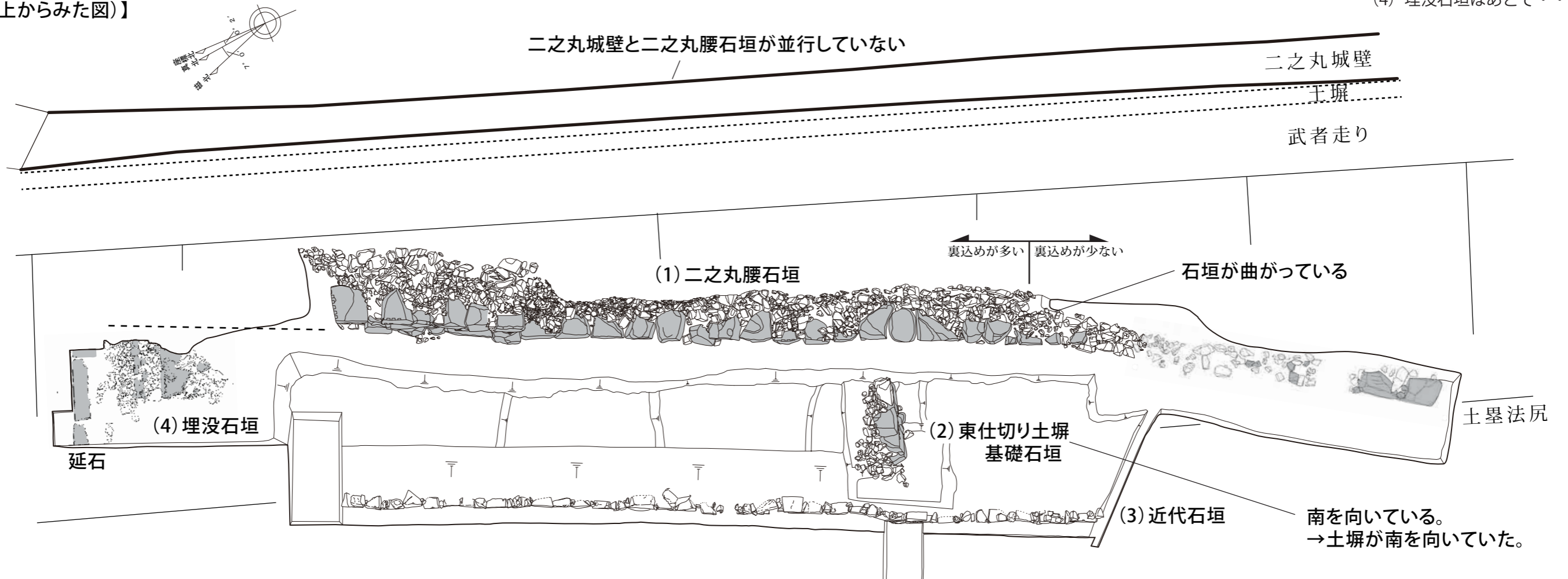
(3) 近代石垣

近代石垣は、**東仕切り土塀基礎石垣を破壊**するように見つけられました。ほとんどは花崗岩によって築かれており、近代の石割技術である「**飛び矢**」跡がみられます。

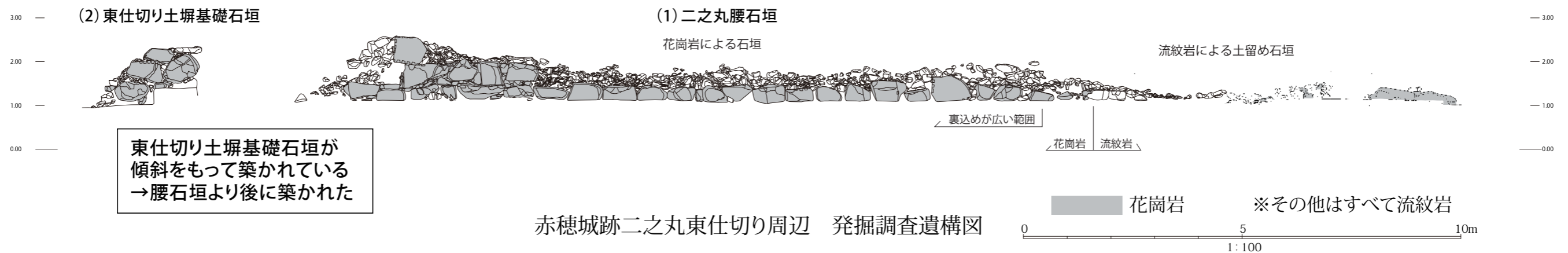
古絵図⑤から、明治時代初期には存在しないことがわかりますが、県立赤穂高校竣工時(昭和3年)の古写真には、この石垣を利用した畑が二之丸城壁裏に築かれていたことがわかります。おそらく明治後半～大正期に畑造成のため、**二之丸腰石垣を破壊してこの近代石垣を築いた**のでしょう。

(4) 埋没石垣はあとで・・・

【平面図(上からみた図)】



【立面図(横からみた図)】



赤穂城跡二之丸東仕切り周辺 発掘調査遺構図

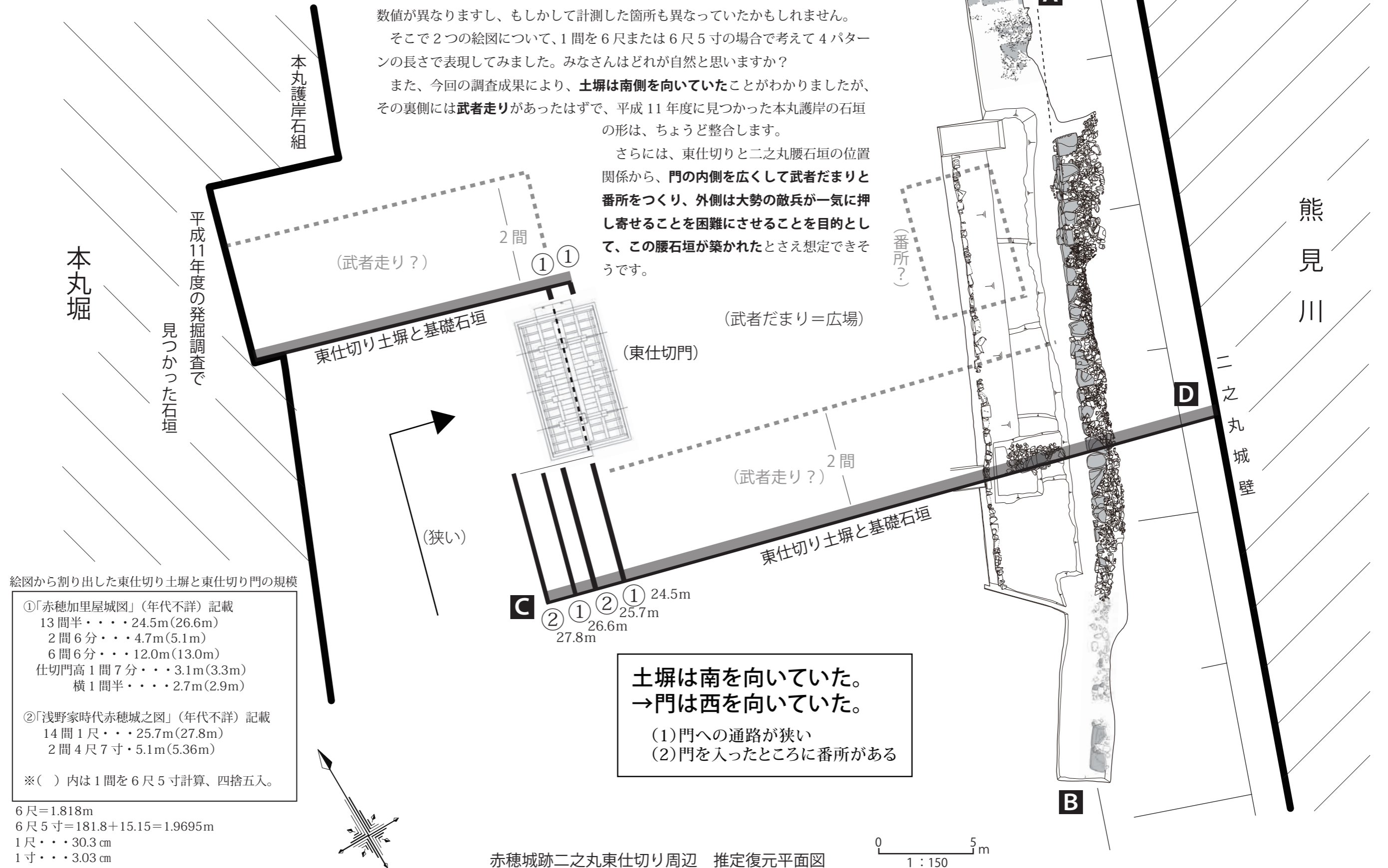
5 二之丸東仕切り周辺の復元案

平成 11 年度には、本丸堀側に「コの字」形に屈曲した石垣が見つかり、これが東仕切りに関する遺構と考えられてきました。そこで絵図に描かれた東仕切り及び東仕切門の寸法を参考とし、平成 11 年度と今回の発掘調査成果をあわせて図示したのが下の図です。寸法の描かれた絵図は 2 種類あり、それぞれ数値が異なります。「1 間」と記載があっても、1 間の実際の長さには時期差、地域差があり、数値が異なりますし、もしかして計測した箇所も異なっていたかもしれません。

そこで 2 つの絵図について、1 間を 6 尺または 6 尺 5 寸の場合で考えて 4 パターンの長さで表現してみました。みなさんはどれが自然だと思いますか？

また、今回の調査成果により、土塀は南側を向いていたことがわかりましたが、その裏側には武者走りがあったはずで、平成 11 年度に見つかった本丸護岸の石垣の形は、ちょうど整合します。

さらには、東仕切りと二之丸腰石垣の位置関係から、門の内側を広くして武者だまりと番所をつくり、外側は大勢の敵兵が一気に押し寄せることを困難にさせることを目的として、この腰石垣が築かれたとさえ想定できそうです。



絵図から割り出した東仕切り土塀と東仕切り門の規模

- ①「赤穂加里屋城図」(年代不詳) 記載
 - 13 間半・・・24.5m(26.6m)
 - 2 間 6 分・・・4.7m(5.1m)
 - 6 間 6 分・・・12.0m(13.0m)
 - 仕切門高 1 間 7 分・・・3.1m(3.3m)
 - 横 1 間半・・・2.7m(2.9m)
 - ②「浅野家時代赤穂城之図」(年代不詳) 記載
 - 14 間 1 尺・・・25.7m(27.8m)
 - 2 間 4 尺 7 寸・5.1m(5.36m)
- ※() 内は 1 間を 6 尺 5 寸計算、四捨五入。

6 尺=1.818m
 6 尺 5 寸=181.8+15.15=1.9695m
 1 尺・・・30.3 cm
 1 寸・・・3.03 cm

**土塀は南を向いていた。
 →門は西を向いていた。**

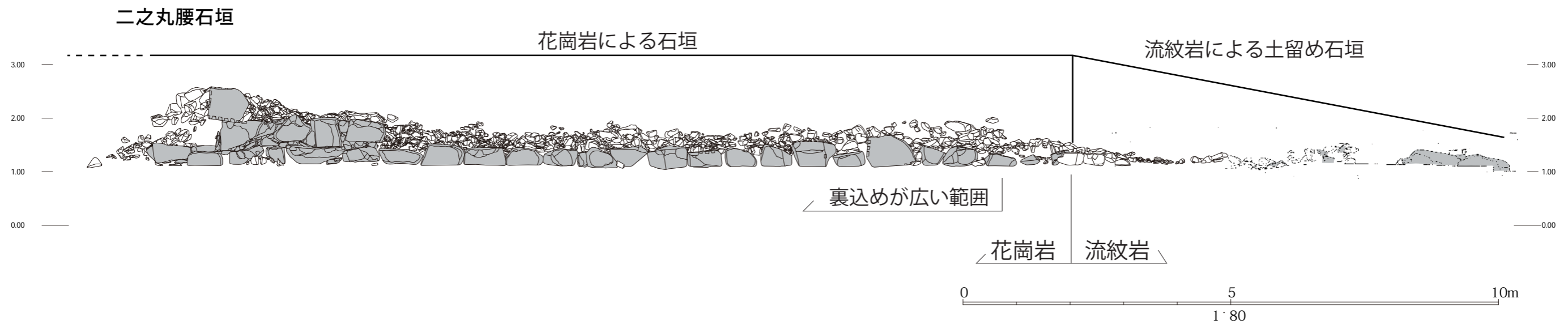
(1) 門への通路が狭い
 (2) 門を入ったところに番所がある

赤穂城跡二之丸東仕切り周辺 推定復元平面図

0 5m
 1 : 150

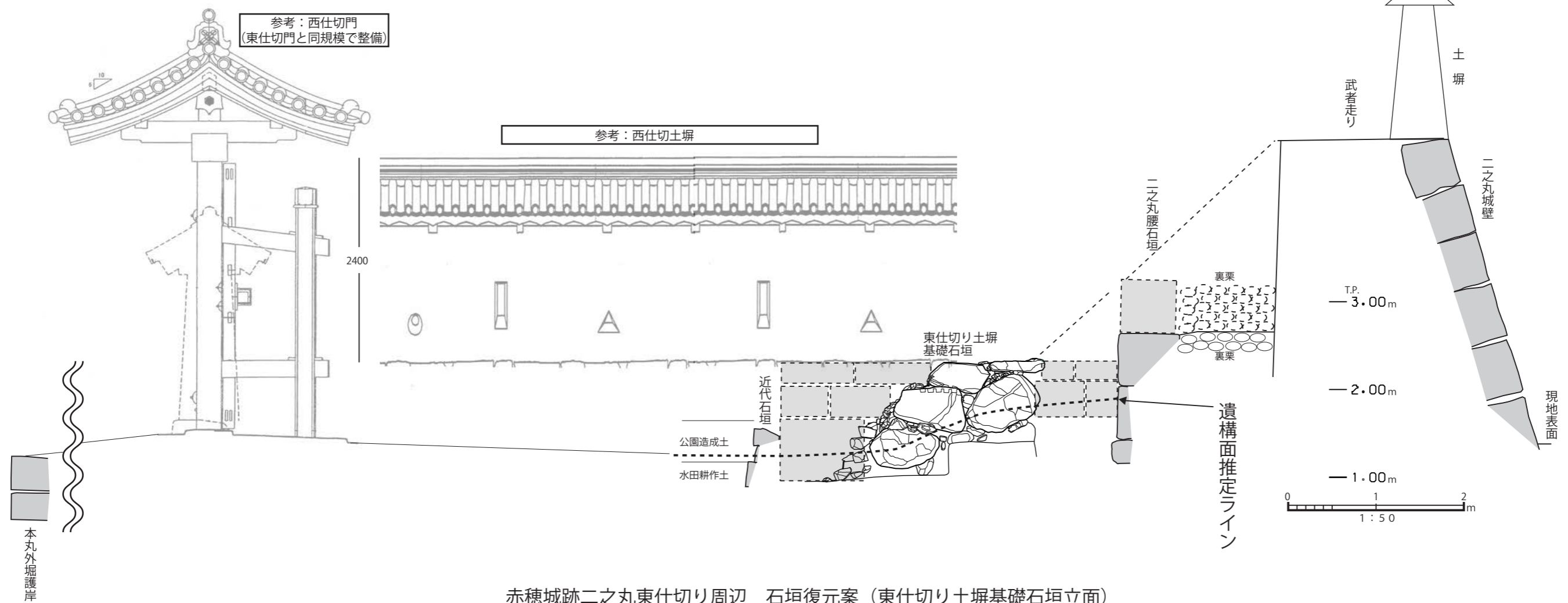
5 二之丸東仕切り周辺の復元案（立面）

【立面図（横からみた図）】A Bライン



赤穂城跡二之丸東仕切り周辺 石垣復元案（二之丸腰石垣立面）

C Dライン



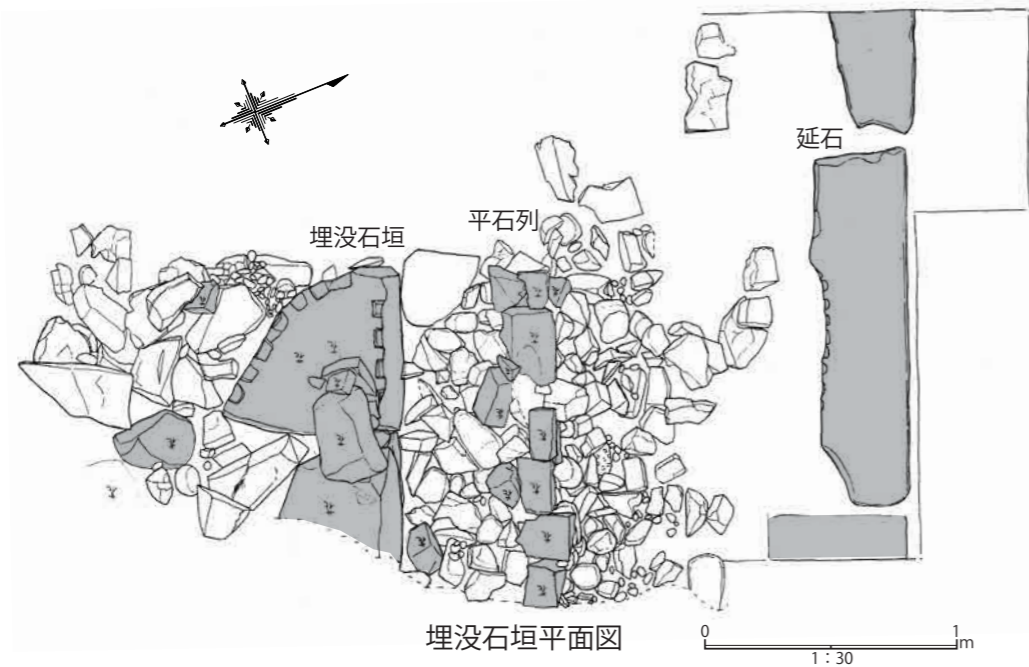
赤穂城跡二之丸東仕切り周辺 石垣復元案（東仕切り土塀基礎石垣立面）

6 さらに古い埋没石垣の発見

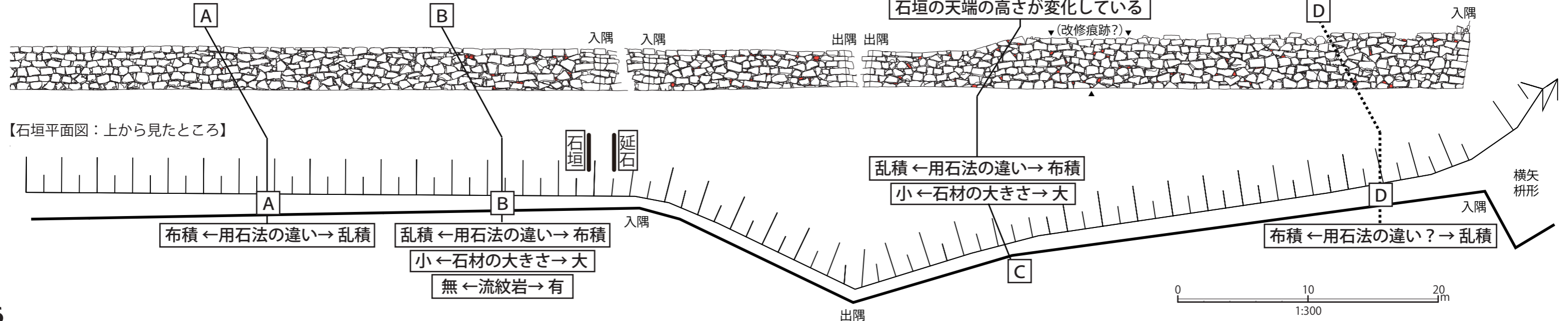
今回の発掘調査では、より古いと思われる**埋没石垣**も発見されました。

下図面にあるように、北向きの埋没石垣の前に**平石列**が見られるほか、その1mほど北側には、**延石列**が見つっています。これらの特徴を挙げますと、

- (1) 二之丸腰石垣の石垣の根石にはなかった栗石が、この埋没石垣には見ついていることから、根石はさらに下にあり、**二之丸腰石垣より古い**と考えられる。
- (2) 埋没石垣前の**平石列**が**当時の地表面に出ていたもの**とすれば、腰石垣や東仕切り土塀基礎石垣で確認された地表面よりも下層となる。
- (3) 延石の上面がたいへん平滑に加工されているため、**延石は当時の地表面に出ていた可能性が高い**。
- (4) 延石の北側でも、30cmほど下に延石らしきものが当たる。**雁木**（階段）の可能性も考えられる。



【石垣立面図：横から見たところ】



絵図にみる東仕切り周辺の違い



A 赤穂城下町絵図

年代不詳
赤穂市教育委員会蔵



B 赤穂城下町絵図

寛文元(1661)年~寛文8(1668)年頃
姫路市城郭研究室蔵



C 赤穂城内土屋舗間数之図

元禄15(1702)年(昭和6年写)
花岳寺蔵

さらに絵図を見てみましょう。

一般的にみられる赤穂城の絵図は上図のCのものですが、Aの絵図も比較的多くみられます。この形は、赤穂城築城に際しての図面という説もありますが、本当にこのような形があったのかはわかりません。しかしこのAとCの間の形とも言える、**Bの絵図があります**。

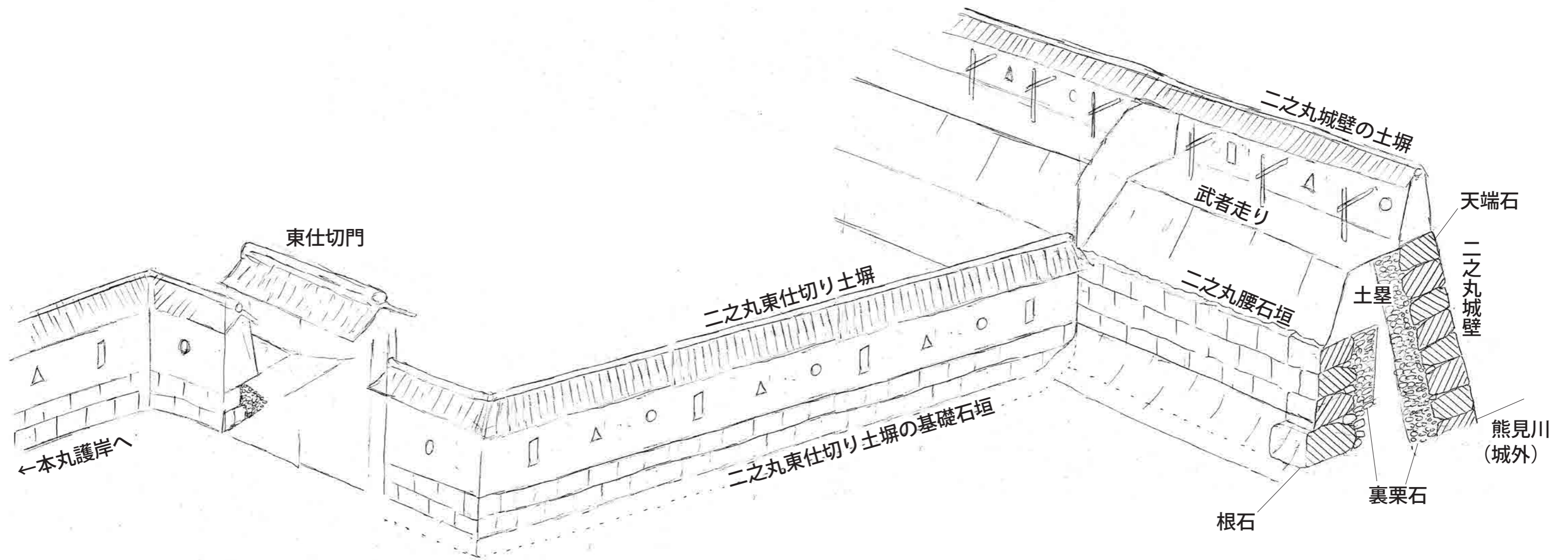
この絵図は、赤穂城や城下町のみならずその周辺も描いたもので、塩田の開拓状況から、**寛文元(1661)年~寛文8(1668)年ころを描いた絵図**と考えられています。これによると、二之丸城壁は内側に深く屈曲して開口しており、入口があったように描かれています。今回見つかった古い石垣は、こうした施設に伴うものであった可能性も考えられるのです。

この説をとるならば、**東仕切り土塀の基礎石垣が腰石垣に斜めに取りついていること、二之丸石垣と二之丸腰石垣が並行していないこと、そして二之丸城壁の天端の高さが変化している**(下図のC)ことは、すべて**築城直後の改修によってできた**ための現象と考えることもできます。

しかし、武家諸法度によって大名の城普請が厳しく統制されていた時期に、**はたしてこのような大きな改修ができたのか**、という疑問も残ります。また、この箇所は江戸時代には熊見川(当時の千種川に相当)に面していたため、**幾度かの洪水被害により改修がなされていた可能性**も考えられます。赤穂城には、まだまだ解かなければならない謎がたくさんありそうです。

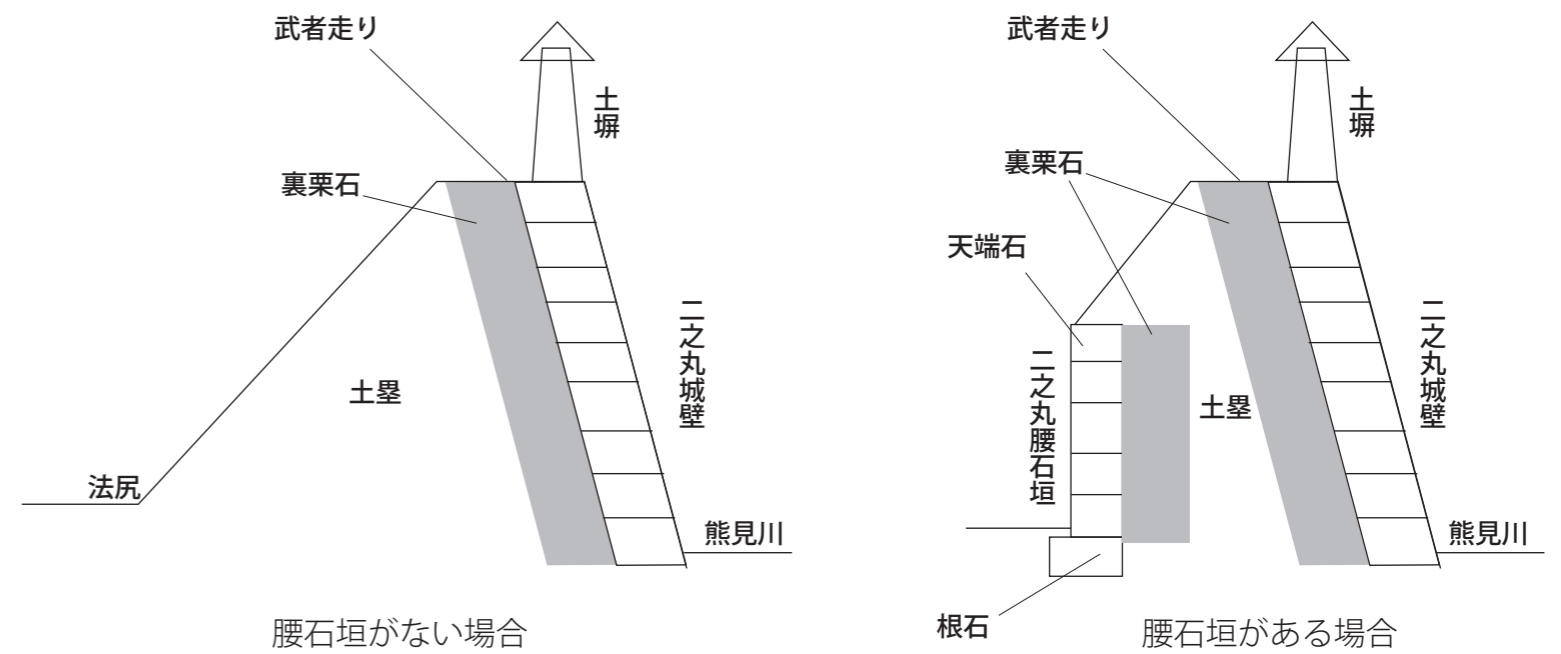
今後も、こうした石垣の調査を実施することで、赤穂城の石垣の来歴が明らかになることでしょう。

二之丸東仕切り周辺のイメージ図



赤穂市立歴史博物館 展示ジオラマ

【断面の模式図】



写真でみる
二之丸庭園
発掘調査



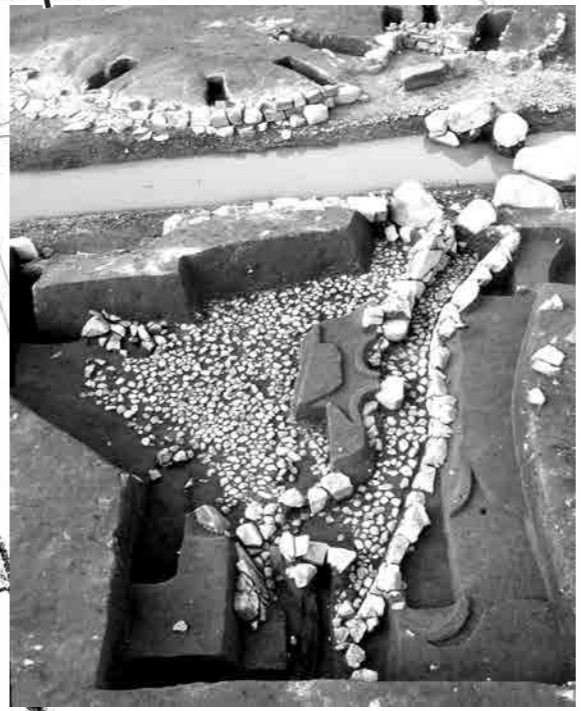
上流部全景



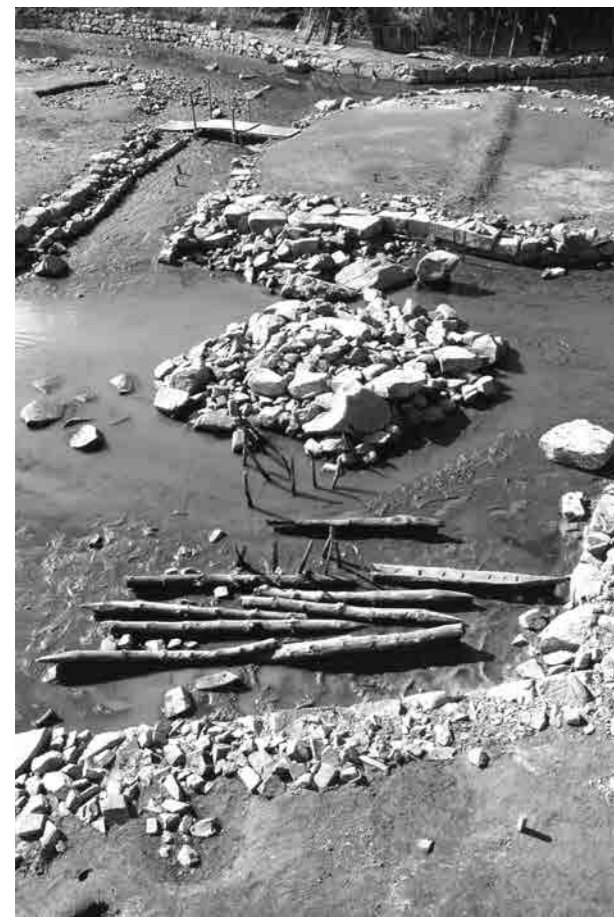
大石頼母助屋敷跡



小島 (小) をのぞむ



上流部の入江



小島 (小) 周辺の集石



西仕切門跡



上流部の入江

二之丸庭園 整備の現在

埋没石垣遺構露出展示 (平成 16 年度)



東屋 1 (平成 16 年度)

傘亭 (平成 24 年度)

飛石 (平成 17 年度)

東屋 2 (平成 25 年度)

舟屋 (平成 24 年度)

大石頼母助屋敷跡

大石頼母助屋敷門
(平成 20 年度)

表門 (平成 19 年度)

舟着

上流部

池泉護岸 (平成 15 ~ 18 年度)
植栽 (平成 17・18 年度)

土堀 2

洲浜

もみじ山
(平成 22・23 年度)

(西中門)

下流部

護岸 (平成 15 ~ 18 年度)
盛土 (平成 22 年度)
植栽 (平成 23 年度)

西仕切門
(平成 21 年度)

土堀 2 (西仕切り土堀)

